

## 心を育てる人との関わり

## 「ある日のこと」

あーちゃん（年中の女の子）が職員に、「先生、いやなこと書いてある手紙もらった」と訴えてきた。その手紙には、『だいだいだい、だいきらい』と書いてあった。そのいきさつは次のようなことだった。

初めに送り主のこーちゃん（年中の女の子）が、あーちゃんに手紙を書いた。そこで、あーちゃんの『あ』の文字がうまく書けず、『ま』になってしまった。受け取ったあーちゃんは、自分の名前を間違えて書かれたことがいやで、「間違ってる」と強く訴え、こーちゃんが書いた手紙を受けとらなかつた。一生懸命書いたのに受け取ってもらえなかつたこーちゃんは、悔しい気持ちから、「だいだいだい、だいきらい」という手紙を書いてしまった。そして今は、「書いてしまった悪かった：」と思っている。

そのことを確認し、職員も加わり三人で話し合った。

あーちゃん 「どうしてこーちゃんは『あ』なんて簡単な字書けないの。間違わないで書いてほしかった」

こーちゃん 「難しかった。書こうと思ったけど『あ』が書けなかつた」

職員 「本当は、書きたかつたんだね」

あーちゃん はふくれた様子で職員の話聞いてる。

職員 「難しいことと簡単なことって、みんな少しずつ違うんだよね。あーちゃんが簡単に書ける『あ』の字もこーちゃんにとっては難しかったのかもしれないね。それでも書いたのはどうしてかな」

あーちゃん はずっと黙っている。



職員 「あーちゃんのこと好きだからだね。だから一生懸命書いたんだと思うよ。その気持ちはわかつてもらえるかな」

あーちゃん 「うん」

職員 「こーちゃんも悪いと思ってるって、さっき話してくれたよ。あーちゃんはどう？」

あーちゃん はじっくりと考え、長い沈黙の時間が続いた。

あーちゃん 「こーちゃんに手紙書く」

職員 「なんて書くの」

あーちゃん 「『あ』って書く。『あ』の字、教えてあげる」

こーちゃん 「あーちゃん、あんな手紙書いちゃってごめんね」

こーちゃん がつぶやいた。

子どもたちは、親や保育者など、周囲の大人に自分の感情を受け入れてもらい安心感をもつ。その安心感をもとに、それまで気づかなかつた相手の気持ちを想像している。相手の気持ちを理解しようとする心の動きが、次の行動への手立てを考え出す。

「友だちとは仲良く。『だいきらい』なんて言うってダメ。悪いことをしたら謝る」などと、言葉だけではなかなか伝わらない。出来事の中で子ども自身が感じ、考え、学び取るには、大人と一緒に感じ、大切さを伝えながら、子どもたちが自分で考え解決できることを信じ、見守ることが必要だ。

子どもの心に寄り添い、その時々のお気持ちに共感すれば、行動の事実の背景にある、子どもの小さな心の動きが見えてくるのではないだろうか。

子どもたちは、自分の思いをもとに、表し方や伝え方、受け取り方を学びながら、周囲の人たちとの暮らしを作っている。きつと、これからも数々の行き違いや予想外のことに会うことだろう。ときに、戸惑い、悩むことも経験していく。けれども、様々な感情を味わうからこそ心が育ち、自分以外の他者の気持ちも考えようとすることができるのだ。このような経験をもとに、自分の気持ちを見つめ、相手の気持ちと向き合いながら、まわりの人たちとの関係性を築いていくと願う。

